

Life Design Focus

葬儀の参列者を日本とアジア諸国で比較する

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 小谷 みどり

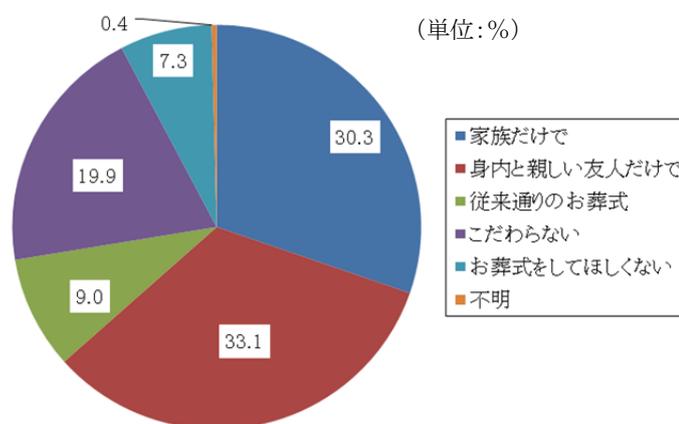
<参列者の少ない葬儀が増加>

最近、わが国では家族を中心とした規模の小さな葬儀が増えている。公正取引委員会が2005年に葬祭業者におこなった調査によれば、個人葬の参列者が減少したと回答した事業者は67.8%にのぼった。

バブル景気の時代は、一般的な葬儀でも、参列者は優に100人を超えていたが、そのほとんどは、遺族の仕事関係者などで、故人とは直接面識がない人たちであった。その結果、その頃のお葬式は、慣習やしきたりに従った社会的な儀式にならざるをえなかった側面がある。遺族は、仕事関係など義理で参列する人の世話に忙しく、故人とゆっくりお別れするゆとりがなかったという経験をした人も少なくないはずだ。

筆者が2012年におこなった調査では、「家族だけでお葬式をしてほしい」と考える人が30.3%、「身内と親しい友人だけでお葬式をしてほしい」と回答した人が33.1%おり、合わせて6割以上が、家族を中心とした葬儀を希望していた（図表1）。一方で、「従来通りのお葬式をしてほしい」と考える人はわずか9.0%にとどまった。家族葬志向は、従来の葬儀のあり方へのアンチテーゼでもあるのだろう。

図表1 自分が亡くなったら、どんな規模の葬儀をしてもらいたい



注：調査対象者は20歳以上84歳以下の全国の男女765名（第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出）、調査時期は2012年9月
資料：第一生命経済研究所「迷信や言い伝えに関する意識調査」

社会の変容による影響もある。その一つに、死亡年齢の高齢化がある。故人が超高齢で、なおかつ子どもがすでに定年退職をしていると、家族以外の参列者が必然的に少なくなるからだ。また地域のつながりも希薄になり、町内会が葬儀にかかわることも少なくなった。かつて葬儀は地域を挙げておこなう社会的な儀式だったが、昨今、家族や個人のプライベートな問題としてとらえる傾向が出ている。

＜参列者を集めるための演出＞

ところが、アジア諸国の中には、いかにして大勢の参列者を葬儀に呼んでくるかが大事だという地域や国がある。

今年に入り、中国では、「社会のモラルを乱す」として、お葬式でストリップショーをおこなうことを禁止し、警察による摘発を強化している。中国では、お葬式の参列者が多いほど、故人への弔意や尊敬の念を表せるといった考え方が伝統的にある。そのため、少しでも多くの人に参列してもらおうと、特に中国の農村部では、余興としてストリップショーを開くことが慣習化している。しかし、子どももいる公衆の面前で女性が裸になるのはわいせつ行為だとして、文化省はストリップショーを禁止する声明を発表したのである。

中国だけでなく、葬儀でのストリップショーは台湾でもおこなわれていた。しかし、死生学や宗教学の学者、葬儀業者、関連事業者などで組織される中華民国殯葬礼儀協会（1995年設立）は、泣き女やストリップの習慣（写真1）は、①音がうるさい、②子どもの教育によくない、③女性蔑視である、といった点で良俗に反することであり、正すべきであるとして、悪しき慣習を撲滅する運動をしている。

写真1 台湾農村部の葬列を表現した絵（葬列に、ストリップ嬢を乗せたトラックも描かれている）



撮影：小谷みどり（所蔵：金寶山）

その結果、葬儀社がそのような演出を自粛するようになり、現在では、ストリップは台北市や新北市などの都市部ではみられなくなった。とはいえ、地方に行けば、葬儀社が手配した、セクシーな衣装をまとった女性楽隊が棺のまわりをパレードしたり、ポールダンスを披露したりする演出は当たり前のようにおこなわれている。

フィリピンやシンガポールに住む中国系の人たちの場合、葬儀は数日続くが、夜な夜なマージャンをしたい人がぞろぞろと集まってくる。マージャンに興じている間、遺族に代わって遺体の前で寝ずの番をしてもらってお礼として、遺族は参加者にご飯やお酒を提供する。まさに、マージャン好きにはたまらないスポットなのである。

大勢の参列者を集めたということは、子どもたちにとっては亡くなった親への「孝」でもある。参列者が故人と面識があろうとなかろうと、ポールダンス見たさやマージャンしたさにやってこようとも、とにかくお葬式に人が集まったということがまだまだ重視される風習なのだ。

＜村人総出で死者を送る＞

インドネシアのバリ島では、人が亡くなると、ウク暦に従って、僧侶が火葬にもっとも適切な日を選ぶ（ウク暦はバリ島独自のもので、とても複雑な周期がある）。その日が近ければすぐに火葬することになるが、火葬するにはお金がとてもかかるため、いったん遺体を埋葬し、火葬費用が調達できれば掘り起こして火葬するのが一般的だ。以前は、10年以上も埋葬したままという遺体は少なくなかった。

しかし、最近では、3年から5年ごとに村単位で合同火葬を行うことが義務づけられている。村ごとに共同で良い日を選び、数人の葬儀（火葬）が一斉に行われる。火葬の日取りが決まると、「バンジャール」と呼ばれる地域共同体組織が火葬の準備を行う。バンジャールは、ガムラン音楽やさまざまなダンスのグループも持っていて、村の宗教儀礼はすべて地元のメンバーだけで取り仕切れるほどのプロ集団でもある。村人総出で何週間も前から式の準備が行われ、それぞれの割り当てに専念するし、ひつぎや遺体を入れて運ぶ輿も、村人たちが手作業で製作する。

筆者はバリ島の火葬に何度か立ち合わせていただいたことがあるが、村を挙げての大イベントで、「人は死んだらこうやって送られていくのだなあ」と感動した(写真2)。

中国系の人たちと、ヒンズー教徒が多いバリ島では葬儀をめぐる社会環境や考え方は異なるが、大勢の人たちが葬儀にかかわるという点では同じである。しかし日本では参列者が少ない葬儀を志向する人たちが増えており、同じアジアにあっても、葬儀に対する考え方が異なるのが興味深い。

写真2 バリ島のお葬式の様子



撮影：小谷みどり

(こたに みどり 主席研究員)